

## 太陽活動極大期の共回転構造について

### On co-rotating structures in the solar wind at solar maximum

# 三宅 互[1], 斎藤 義文[2], 早川 基[2], 松岡 彩子[2]

# Wataru Miyake[1], Yoshifumi Saito[2], Hajime Hayakawa[2], Ayako Matsuoka[2]

[1] 通総研, [2] 宇宙研

[1] CRL, [2] ISAS

太陽風中の共回転構造の存在は、太陽風パラメタの変動の中・長期期予測を可能とし、宇宙天気予報にとって重要な鍵となる。前年の学会で報告したL5点での太陽風モニターの有効性の議論も、共回転構造の存在・その変動特性が根底にある。一方、太陽活動極大期においては、コロナホールからの高速流が消失し、太陽風中に共回転構造が見出しにくくなることが知られている。惑星間空間を飛翔する「のぞみ」とL1点のACEで観測された太陽風速度の相関から、2000年半ばに共回転高速流が消失した時期が出現したが、この時期においても惑星間空間磁場の極性はある程度の共回転性を示しており、コロナホールに起因する高速流以外にも、ある種の共回転構造が存在することになる。これから、太陽活動極大期にも、条件とパラメタを限れば、共回転性に基づく太陽風パラメタの予測の可能性が示唆される。